

2026/10/2

だいぶ古い話（10年ほど前）になってしまいますが、コロナ禍以前のまだゆったりと時間の流れが感じられるころの話です。

Web ニュースより：

5年まえに『衝撃的』にメディアに登場した（させられた）数学者の望月新一教授の世紀の大論文の正否に関して最終的に認定の判断がくださったようです。末端の数学愛好家として心より祝辞を申しのべたいと思います。なんといっても、独創的な数学言語を開発し駆使された長大な論文を解読するために、その道の手練をもってしても、5年の歳月がかかったという事実に深い感慨をおぼえるところです。自然科学で、なんとか賞をもらったのどうのこうのなど、吹けば飛ぶような話である。

数学の未解決問題の解決というイベントは、世間一般に数学という鉛のカーテンの向こう側を一瞬かき見ることができる唯一の機会かもしれない。とりわけ、整数論は、数学のなかでも独得の位置をしめていて、いわば、数学のなかの数学というところである。ともかく、難しいのだ！！

望月教授の研究手法というのは通常の研究スタイルを、まったく一新するところに、まず瞠目する。つまり、自分のHPを公開して、研究の過程をあますところなく、開陳するという手法である。いわば「カレードマン：大胆不敵」という見方ができるかもしれないが、おそらくちがう：この難問に自分が挑戦している問題の当否（証明）を同業の研究者に、確認（チェック）してもらいたいというきわめて真剣は気持ちで臨んでいるというのが本当のところだと思います。これは、学者としてきわめて真摯な態度です。

しかし、懸念するところがないではない。あまりにも独創的な理論の故に、この理論を噛み砕くことができる研究者がどれだけいるかという問題がある。これは、教授自らが告白しているところで、如何に「布教していくか」というのが今後の大きな課題としてのこされているようである。あまりにも独創的な理論は敬遠される！！ガロア理論は理解されるのでさえ50年かかったのだ！！

しかしながらキョウビ、学問研究の世界は墮落の極まで行き着いている現状をながめるとほんとうに、清々しい気分になることは事実です。

うっかり、HPなどにアイデアをのせたら、パクられるというケチな考えはしない。恥ずかしながら、ヤツガレなどは、そういう考えをもった手合いのひとり。物理の業界では、人の論文を（あきらかに知ってながら）引用しないでシラを切るというのは平然と行われますからな。油断がならない。

そういう低劣なレベルの話ではない、完全に透明無垢な世界というのが整
数論という学問である。まったく妥協の余地がない。

『ようやった。学者の鑑ぞ。それでこそ数学者というもんデ。若いもんに
コンナの爪の垢を煎じて飲ましたいくらいや』。。。。。

このような、高邁かつ永遠の課題から一転して、セコい個人的体験を開陳
させていただきます。

2017年フランス（つづき）

9月5日： 今回のフライトは、久しぶりに、Kix（関西空港）から。10
時半と、少し早い便であるが、6時前のリムジンタクシーにて、自宅を出発。

予定通り離陸して、定刻より半時間ほどはやく、パリドゴール空港に着陸
した。ターミナルは2E。この空港は、ともかく巨大で、到着ターミナルか
ら、延々と動く歩道を歩かされるのである。これで、終わりかと思うと、連
絡電車がやってきてやっと所定の入国審査場にたどり着いた。以前は、日本
からの便は、2Fと決まっていた、すぐに、手続きは終わったのであるが、
最近数年の間に変更があったのだろう。この分では、帰国のときも同じこと
を繰り返させられるのだろう。

入国審査が終わりスーツケースを受け取って、非可逆の出口から実際のパ
リに入った。いつも思うのであるが、たとえば、忘れ物をしたので、再度入
れてくれというかどうかの対応をされるであろうか。毒物が入った袋を置き
忘れたとか嘘をいうとどうなるのだろう。

11区にあるNationからでている、ヴォルテール大通りから入った Leon
Frot どりにおる Comfort hotel nation に到着。フロントには、小柄で黒ぶ
ちの眼鏡をかけた、いわゆる「お茶目な感じの」インド女性のジャスミンがい
た。少々なまりが強いが、早口の英語で、テキパキと応答してくれる。「ヴァ
レリアはどうしたか」と聞くと、「彼女はやめた。結婚しているので、働く必
要がないので、しょっちゅう旅行ばかりして、ホテルの仕事もまともにして
なかった。」とかなり批判的な口ぶりであった。とかく、女性同士の評価と
いうのは、厳しくなるという例であろう。

部屋に入って、少しくつろいでから、テレビを見ようとスイッチを入れた
のであるが、どのボタンをおしても作動しなかった。どうせ、フランス語は聞
いてもわからないからとあきらめて、メシの調達にでかけた。近くにある中
華で、焼き飯とエビの甘煮と餃子2個を買った。これで9Euほどしたから、

それほど安くはない。

あくる日は、なじみのアルジェリア出身の長身の Samiuel に交代していた。例によって、旅行にでかけるので、荷物を頼むとスーツケースを預けて、8 時 40 分、リヨン駅発のマルセイユ行きの TGV に乗るべき 7 時 50 分ごろにホテルをでた。Nation から Lyon 駅まで、一駅だから便利だ。

1 マルセイユ

昨年につづき、プロバンスを探訪。今回の企画は紆余曲折して、結局プロヴァンス再訪ということになった。

TGV は定刻にリヨン駅出発。

ちなみに、パリの駅であるのに、リヨンの名前がどうしてついているかというと、主な行き先の名前をつけるというだけの話らしい。つまり、パリーリオンというのをそのままつけてのであろう。

Eurail pass を保っていたのであるが、TGV は座席指定が必要なようで、この購入に関して net でのやりかたがわからなかったので、B 氏に頼んで購入してもらった。iDTGV という特別な切符である。なにかわからないまま、乗ったのであるが、となりの座席の若い女性が、予約をなしで乗ったらしく、最終的に移動して行った。

閑話休題：マルセイユまでは、途中で TGV-Lyon と TGV- Avignon に停車した。ただし、帰りは、アヴィニオンからノンストップというのが、痛快である。およそ、600 キロをノンストップというのは日本では考えられない。これだけでも、パスを購入した価値があるといえる。リヨンをすぎたあたりから、風景は次第に変化していく。乾いた大地と、青い空と朱色の屋根。

予定どおり、12 時まえに、マルセイユ・サンシャルル (St-Charles) 駅に到着。この駅がマルセイユから中心街へと続いていて、途中で旧港 (Vieux-Port) へ行く道にわかれる。この旧港が、かの「フレンチーコネクション」の舞台となったのであろう。

マルセイユによった主な目的は、Restaurant Miramar で、ブイヤベースを食するあためである。

ヨットのマストがひしめく、海岸通りに面して、彼方の高台に、ノートルダム大聖堂が望める。ブイヤベースは、この店の逸品である。じつは、これ

で三度目である。1990年に、マルセイユの大学でゼミをしたときに、ホストの教授 (BS 氏) にディナーをおごってもらったのが最初である。このときは、教授には悪かったが、非常に体調がわるく、ほとんどなにを食ったかわか覚えていない (以下の註)。

2度目は、5年まえにアルルに滞在したときに、パリに帰るついでに立ち寄ったときである。このときはブイヤベースは食しなかった。それは、二人前からとなっていて、高くつくのであきらめて他のものを注文した。(ブイヤベースは、アヴィニオンのレストランで食べた)。今回は、一人でもオーケーということであった。この料理は一言でいうと魚のスープを極端に濃縮したもので、しかもかなり塩がきつい。味は、日本人の口にもあう。おそらく、ヴェトナムあたりの、ニョクマムというのを共通のものではないだろうか。基本的には、昨年のコルシカで食した fish soup と同じであった。ただし、こちらのほうは、値段は3倍以上ちがう。薄切りのパゲットを焼いたものに、魚をベースとしたペーストに、細切りのチーズをそえて、食べるのである。今回も、まずこのスープが前菜としてでてきた。このあとで、本番がくるのであるが、その前に給仕の男が現物とおなじモデルを見せて、説明するのである。フランス語であるから適当に聞きながしたが、それをみて、少々不安になってきた。つまり、鯛のような魚がまるごと濃い黄土色の液体のなかに浮かんでいるのである。すでに、前菜のスープでかなり腹に来ているところに鯛のまるごとである。料理がやってきて、少々後悔したものである。魚が一匹分、切り身として液体のなかに沈んでんでいて、そこに野菜して、柿色の人参が浮かんでいた。こんなところで、人参の固まりを食わされるのかと思って、ナイフをいれてみると、切れ具合がちがった。なんとジャガイモではないか。給仕の女性に、「人参 (carrot) と思っていたら、ジャガイモだ」というと、carrot というのが分からないようであったが、サフランで、色をつけているのだと説明してくれた。

そんなこんなで、ゆっくりとした昼食をすませたのが、3時すぎになっていた。駅の切符売り場で、帰りの TGV の予約をすませた。ついでに、SNCF のプロヴァンスーコートダジュール地域時刻表を手にいれた。東はイタリア国境から、西は、アヴィニオンまで、北は、ブリアンソンまで網羅してある。ニームには、タラスコンで、アヴィニオンから分岐する。

註：因みに、そのときに受けた待遇に関して記す。結論をいうと、なにか奇異な感じをうけたのである。まだメール連絡があまり普及していないころで、南仏にいくついでがあるので、そちらでゼミをやらせてくれないかという申し出に対して、承知したという連絡をもらったのであるが、その後待てど暮らせど連絡がなく、こちらから、再度連絡をすると、やっと、出発前になっ

て、いついつ来いという返事が来たのであるが、どこのホテルに泊まるとか、大学までのアクセスなどとかいっさいなかった。(あとから考えてことであるが) どうやら、承知したのはいいが、どうもまずかったかと思ったのか、こちらがあきらめるのを待っていたのではないかと推測された。それでも、ダメもとであると思って、再度電話連絡を試みた。ニースのホテルからであった。いまのように PC から wifi をつかってインターネットという時代ではなかった。控えてきた教授室に電話をして、秘書に professor B と話したいと言ったのであるが、英語が通じなかった。しかたがないので、ホテルのフロントの女性に、英語で用件を書いたメモを渡して、これを、フランス語に翻訳してこの番号に伝えてくれと頼んだ。女性は、こころよく用件を引き受け、なんとかこちらの意思を伝える事ができて、日にちと時間を聞き出すことができた。しかし、研究所と部屋へのアクセスの指示はなかった。マルセイユのホテルで、大学へのアクセスを聞き出し、なんとか教授の部屋までたどりついて、セミナーをしたが、聴衆は、所属のポスドクと院生のたった二人だけであった。そんなわけで、こちらもまともに話す気など起こらず、なにを話したかまったく覚えていない。ともかく、コケにされた印象しかもっていない。のちに、LPS の B 氏に、BS というのを知っているかと聞いたところ、Yes と言った。研究者の仲間でも、ある意味で知られているようで、「なにか身構えたところがある」というと、「そうだろう」という返事が返ってきた。B 氏は、フランスのエリートであるが、いかにもリラックスして人に対する応対に寛容さを持ち合わせているのと、ずいぶん対照的であった。

2 ニーム

マルセイユ発、4 時すぎの列車に乗り込み湾岸をながめる景色をみながら、石灰の大地を電車は走っていった。海側のほうが景色がよかったが、座席はいっぱいであった。目を海をながめようと、視線を変えると、女性が気をつけて、ブラインドをあげてくれた。

タラスコン (Tarascon) - サンマルタンクロウ (St.Martin Crau) のあたりから、風景が少し変化してきた。プロヴァンス独得のむき出しの石灰の大地が消えて、背の低い灌木の平地になってきた。かれこれ、1 時間半ほどでニームに到着した。

今回は、古代ローマ都市ニーム；ここは初めての場所である。あとで、気がついたのであるが、かの Arles (アルル) は、ニームから、30 分くらいのところにあるのだ。ともに、典型的な古代ローマ植民都市である。

この地方の県を中心地として街の規模は大きい。フランスの街の骨格は、だいたい相似形で、ともかくエレガンスと旨としているところは代わりはな

い。春に訪問したポアチエも、規模は小さいがおもむきのある街であった。

駅から北西の方角に、少し傾斜ができて、真ん中に水路を引いた広いアヴェニューが、街の中心にのびている形である。両側には、こぎれいな店々が立ち並んでいる。

ホテル：カンパニール（Canpanile）は、ニーム駅および、中心街からすこしはなれている。いわば新地というところである。

web の地図の案内によって、ホテルから駅から歩くことにするが、方向が定かでない。南西の方向のようであるが、適当な目印になるものがない。方向感覚が悪いのは先天的遺伝的な要素であろうか。一瞬に自分の位置を把握できるものがある。自分は、まったくダメである。かならず迷ってしまう。案内によると、鉄道は高架になっていて、それに沿った道を行くように指示されているが、パネルで表示された通りの名前が一致しない。とりあえず歩きだすが、方向がどうみても北東である。ポリスをつかまえて聞いてみた。「この道でよい」と言われたが、どうも怪しい。結局、地図の示す通りに、高架線路にそった道路を歩いて行った。高架の下に店が出来ていていた。その一つで、ボトルの水を買った。どうやら、方角は間違いは、なさそうであるが、高架をくぐる脇道がいくつかあるのだが、そこひとつを適当に左に折れて進んでいくと、アジア系の若者が歩いているのを捕まえて聞いてみた。幸い英語が話せたので助かった。ご多分にもれず、ホテルの場所をスマホで確認して、自分と同じ方角であるから、ついて来いといわれた。両親はベトナムからの移民で、若者はこちらで生まれたとのこと。英語は、job のために習っているとか。人なつこい気さくな青年であった。なにかサービス関係の仕事をやっているようであった。

ニームは、少なくとも、日本では、観光のメインルートとして、紹介されてはいないようだ。ここを有名にしているのは、「デニム」である。デニムの生地は、ここが発祥の地であるらしい。ちょうど、チョコレートの発祥がイタリアのトリノであったのと相似である。

駅からまっすぐに延びるアヴェニューを行くと、つきあたりの広場が街の中心（旧市街）を形成していた。この路の幅は広く少し傾斜になって真ん中に水路が開かれて噴水が要所に設置されて、水が涼しげにたわむれ、左右の歩道にあるカフェで戯う人々に安らぎを与えているようであった。広場の片隅に、観光案内があった。

地理上の位置関係をいうと、ここからアルルまでは車でほんの半時間くらいである。かの有名な、ローマ水道橋：「ポンデュガル」は、ここが起点

になっている。ボンデュガールはニームに水を運ぶための水路であった。1990年に一度来たことがあるが、あのときは、アヴィにオンからバスで行ったが、結構な時間がかかったと記憶する。ニームからは、それほど時間がかからいようであった。今回も行こうと思ったが、町の見物を主たる目的であったので止めた。

観光案内でもらった地図をたよりに散策することにする。広場から左方向に路をへだてて、古代ローマの円形闘技場がある。アルルの闘技場は有名であるが、ここもまた規模としては、同程度のものである。剣闘士をモデルにして、*gladiator* という映画があった。著しい戦績をあげたものは、奴隷から解放されて名誉を与えられるという説明書きがあったような。

3 ツーロン

9/8: ニームをあとに、つぎの目的地のツーロンへ向かう。タラスコンを過ぎたあたりで切り干し大根のような匂いがただよってきた。近くで肥料を扱っているのであろう。フランスは、農業が盛んなところだ。通路をへだてて、反対の席にいた白髪の男がPCを操作していた。数学者の Faddeev に似ていた。Arle に停車した。男に、「ここは、アルルか」と聞いてみた。「Oui」。あの有名なアルルであると同じであると一瞬思わなかったのである。マルセイユに戻って、そこからツーロンまで鈍行で一時間あまり。2階建て電車で、すでに、ほぼ満席であったが、もちろん席は確保することができた。ツーロンがコートダジュールへの入り口である。

途中の駅から、色の浅黒い目つきのするどい北アフリカ系の女性が乗りこんで、前の座席に座った。しばらく、横においたバッグをさして、「これはあんたのか」と聞いてきた。「ウイ」と答えるとそのまま黙ってしまった。そうではないといったとしたら、「いただく」つもりでいたのだろうかと思念をもった。

この話をのちほど、B市にいうと、それは、セキュリティのためだと言われた。持ち主不明の荷物は、当局に通報されるようであった。下手に、荷物をおいてトイレに行って、帰ってくると、処分されているということが、実際に起こりうるので物騒な世の中になった。実際、自分の友人が酷い目にあったとB氏は言った。

ほぼ定刻通り、ツーロン駅に到着。ホテルの名前は、その名もボナパルトである！ ホテルボナパルトは、駅から海に向かって何本目からの通りを行くとすぐに分かった。ここの、女性は英語がよく分かっていろいろと便宜で

あった。しかし、あとで、トラブルがあったことを記そう。

ともかく、コートダジュールの入り口としての、開かぬけした雰囲気はもっているなかなかいい場所である。日本の対比でいえば、いわば、「ニース」対「ツーロン」＝「軽井沢」対「長野」といったところか??

ここは、フランス海軍基地のあるところで、かのナポレオン・ボナパルトがエジプト遠征に出征していったところである。という故事に「憧れて」やって来たという次第である。B氏いわく、「ツーロンは観光スポットではない。歴史にあまり興味がないのでよく知らない。第一行ったことがない」とそっけない返事であった。大方のフランス人もそうであろう。ともあれ、ナポレオンの出征の地である証を確認するには海事博物館に行くほかはない。ホテルにチェックインしてさっそくでかけた。しかし、特筆すべきものが、あるわけではなかった。子供の頃に憧れた、ボナパルトのイメージがどうしても、この記念物と焦点が合致しないのである。

ツーロン訪問の主たる目的は、広大なビーチがあるということを web の情報で知ったからである。郊外のサナリというところだという。そこに行って、サンダルで、ボードでできた歩道をぶらつくつもりでいたのである。何年か前に行った、NY のコニーアイランドを思い出していたのである。しかし、この期待は見事に裏切られた。

ミニチュア車で市内見物。サナリ海岸というのは、このミニチュアで行けるとふんだ。每一時間ごとに出ている。切符を手に入れて、つぎの発まで時間があるので、腹ごしらえてをするために、ケバブの店で、セットのメニューを注文した。豚肉（マトンか？）の塊を円筒状につるして焼き上げて、その表面をナイフで、薄く切り取って行って、その切れっぱしを、二つに切ったインド風のパンのなかにサラダといっしょに、マヨネーズを振りかけて、はさみこむやつ。要はサンドイッチであるが、ともかく大振り（巨大といっていいいくらい）サイズである。これを、コーラとともに、胃袋に流し込むのだ。全部は食いきれずにかならず残すという代物である。

時間がきて、「列車」は出発した。市内の要所。軍港で名高いところであるから、海軍関係の施設をめぐるっていった。海岸に出たのであるが、どうも様子が違う。誰も降りる者はいない。降りて、つぎの列車がくるまで周辺を見物ができると案内にはでていたのであるが。海岸といってもちょっとした海水浴ができる程度の砂浜しかない。サナリ海岸とは大違いである。かつてに想像してただけだ。列車は、小一時間ほどで、もとの出発点の船着き場まで戻ったが、オマケがあって、旧市街の中を狭い路地のあいだを縫うように行った。この風景は、コートダジュールの風景である。昔、訪ねた、ニースの町をまさしく小振りにしたものであった。

これで、市内観光は終わったのであるが、夕食までは時間があるので、少しぶらついて、めばしい風景をデジカメにおさめようと思った。海事博物館の隣は、海軍基地があつて、いかめしく構えた門があつた。その軍服をきた門衛がはりついていて、門を出入りする通行人のチェックをしているようであつた。ちょっとしたことがあつた。気楽な調子で、カメラをゲートのほうに向けたところ、すかさず、門番が、” Hey mister, photo is prohibited !! ” なるほど、ここは、” 通常の場合 ” ではないのだ。あの通行人達は、基地で働いている人間たちであろう。

Dinner は、ホテルの女性が教えてくれたイタリアンへでかけた。けっこうな数の客が入っていた。久しぶりに、シーフードのパスタを食した。量は適度で、ソースの味はなかなかイケた。さて、アクシデントは、ホテルに帰ってから起こった。要は、「閉め出し」を食ったのである。ホテルのフロントは、通常24時間誰かがつめている。しかし、ボナパルトは、(すくなくとも) 文字通りの意味で、そうではなかった。玄関が鍵が掛かつていて、外から眺められるフロントは暗かった。ドアの側に、なじみの四角い箱型のマイクがあつて、そこに向かって「Please open the door」と言った。しかし、なんの反応もなかった。間をおいて何度か試みたのであるが、返事はなかった。ついに、ドアを叩くという荒手の行動にうったえた。これも何度か試みたが、これにも反応がなかった。段々と気持ちは「怒り」に変わってきた。なにをしているのだ、フロントは。ついに通行人が聞いたら、おどろくほどの音量で、ドアをたたきつけた。血相を変えて、黒人の男が階段を降りてきた。『どういうつもりだ!』『たしかに、こんな非常手段に訴えたのは悪かったが、24時間オープンと掲げているではないか。なんでフロントにいないのだ』『仮眠をとっていたのだ。用事があれば、このブザーを鳴らせばいいのだ!』。あらためてみると、マイクの側にボタンがついていて、それがブザーであつた。こちらの気が回らないのは迂闊であつたが、『それなら、ブザーを鳴らせと表示をしておくべきではないか』と、こちらも、少々怒気を含んで応酬した。さすがに、それに対する反論はなかった。

この顛末をB氏に伝えと、「たしかに表示をするべきだ。あそこは観光地ではないので、英語による旅行者への配慮などは、あまりできてないと思う』とのことで、ドアを叩くという荒手のアクションに対してはやむを得ないということであつた。

ツーロンでの2日目

夕べのアクシデントには、少し気落ちしたが、気分をあらたに朝食をとり、階下におりた。狭いがこぎれいなダイニングで、すでに、何人かが陣取つ

ていた。丸テーブルが2つしかなく、ひとつは、団体が占領していて、のこのテーブルに男が二人座ってロシア語のような言語で話をしていた。二人は連れだと思ったが、そうではなかった。

ファロン山異聞：ここは、ツーロン随一の名所であるらしかった。まえの日は、一転して曇天で、いまにも降り出しそうであった。最寄りのバス停から、ケーブルカーがでていて、頂上までは40分毎に出ていた。バスに乗ったあたりから、雨が降り出してきて、バス停に着いたころにはかなり降っていた。うかつなことに傘をもってくるのを忘れた。手にもっていると、なくすのではないかと思ったからである。しかしこの雨ではそんな心配はなかった。

バス停から少し下ったところに、ロープウェイの駅がある。雨の中を小走りで行ったが、帰りが心配であった。それまでに雨が止むといいのだが。。

ケーブルカーに載って真下に石灰のむき出しの山肌に苔むした岩肌で覆われた山肌がみえて、ツーロンの市街地が望めたが、残念ながら、悪天候で、雨にくすんで景色は、台無しであった。ところどころに、別荘であると思われる家が建っていて、車庫があつて、おまけにプールまで設えられていた。どこかに、車道ができているのだろうがそれは分からなかった。

頂上駅には、しゃれたレストランがあつた。それ以外にはめばしいものはなかったが、なにかの施設ができていた。それから、公衆トイレがあつた。このあたりは、たぶん、トレッキングの場所のようであった。ここから、歩くのがひとつのコースとなっているのではないかと推測された。

頂上の反対側から、別の山並みが広がっていた。雨が強くなってきた。避難場所がない。高台にできた施設に、走って行った。明かりがついていたが入る事ができなかった。乳母車の中におかれていたので、だれかがいるのであろうと推測された、入り口のひさしで雨宿りをしていると女性がでてきた。「ここは、閉めるが大丈夫か」という意味のことを言った。こんなところで、とどまっても仕方がない。ちょうど、石造りのトイレが設置されていて、ここぞとばかり駆け込んだ。なんと先客がいた。自分と似た歳格好の男が座り込んでいた。薄手のジャンパーを着て、ナップサックをもっていた。手にもった紙袋の中からパンを取り出して食していた。おまえもどうかすすめられたが断った。言葉が通じなかったが片言のフランス語から推測するに、男は旅行会社で仕事をしているらしかった。およそ、40分ほど退避したと思う。

雨は小やみになったので、ロープウェイ駅まで戻った。ちょうど昼どきになって、一緒に昇ってきた連中は、レストランで食事をしているようであった。

下へ降りると、にわかに雨足がひどくなってきた。ツーロンの中心へもどるバスの時刻までは10分ほどであった。5分ほどまえになって、停留所の向かいにある、建物のひさしの下で待った。バスに乗り込むと、さらに雨は、はげしくなってきた。ホテルの最寄りのストップで降車したが、ホテルへたどり着くまでに、雨は止む気配がなく、転々と建物の軒先を移動していった。

コートダジュールで、こんな雨に出くわすとはまったく期待していなかった。

4 カヴァイヨン

ツーロンからマルセイユを経て、最後の目的地カヴァイヨンへ。

ツーロンでの予期せぬ雨の洗礼をうけて、少々ひるんだものであるが、なんとかきりぬけて、昼すぎの列車で向かうことにした。しかし、Nice 発の特急インターシティは定刻には来なかった。結局40分遅れでやってきたが、特急が各停に変わった。ツーロンから2つめの駅が、Ollioules des Sanary であった。サナリ海岸とは、距離にして10数キロも離れているではないか！

延着のおかげで、マルセイユからの乗り換えが気になった。案内で、聞くと10番線からだという。アヴィニオンセンター行きで、途中まではニームへ行ったときと、同じルートであった。Miramas で、アヴィニオン方面に線が変わった。。。。それやこれやで、カヴァイヨンに到着。

Web の地図をたよりに、ibis hotel へのアクセスは、駅前通りを行くと問題なく行けるのであるが、念のために駅まへのピザ屋で、道をたずねた。配達の方が親切にも、ちょうどあのあたりに注文のついでがあるから、車で送ってやるから、しばらく待てと言われた。ありがたく申し出を受けることにした。

ここでも、ネタは、なんといっても！ibis hotel の 女将である。(最近『有名』になった) タレントの高畑淳子の声をもったモナリザというところである。

つぎの日は、朝食をすませて、この地を訪問した主たる目的であるデュランス河の探索にかけた。プロヴァンス独特であろうか、かなりの強風が朝から吹いた。

デュランス河のほとり。。。残念ながら特筆すべきところはなかった。ただ、砂利の河原があって、河の流れが日本の川と非常によく似ているという印象をもった。

「デュランスの流れは、カヴァイヨンあたりで、平凡な流れになりやがてローヌと合流する。。。。」(ジャッカルの日より) それでギャップを通過して蛇行をくりかえし、シストロンからカヴァイヨンに至る。

去年は、デュランスの源流であるブリアンソンに滞在した。フランスアルプスの形成する渓谷であった。流れに沿って、こぎれいな家が整然と建てられているところが、フランスであった。峠を超えてイタリア側に行くと、まったく様子が変わる。

ともかく、「河は読んでいる」によって、かき立てられたイメージは、まっ

たく粉碎された形である。だいたい、デュランス河などフランス人は誰も知らない。

デュランス川にかかる橋から、リベロンの山地が遠望できた。あの山のひとつに昇れないか。観光案内のすぐ横に、St. Jacques への道ができています。案内所の女性に聞くと、40分くらいで頂上へ行けるとのことであつた。

Coulon 川のほとり。

案内所によると、カヴァイオンは、デュランス河とクーロン川にはさまれた形で町を形成しているという。

とりあえず、どんなところかとでかけるが、一向にたどりつかない。

5 イルースーラーゾルグ

Isle sur la Sorgue：カヴァイオンのインフォの女性から聞いたスポットである。アヴィニオンに近く、パリへ帰る途次に立ち寄る場所として都合がよかった。「ソルグ河の島」ということらしい。カヴァイオンから一駅のところにある。バスでいけるのであるが、前日は日曜でバスサービスはなかった。ここは小さな駅であるが、観光スポットになっているようで、TGV の切符も扱っているようであつた。

この町は、ソルグ川から引き込んだ水で水車をまわして、紡績産業が盛んであつたという。町は、水路で囲まれて、そこに10基ばかりの水車が設置されていた。この水路に沿って、カフェあるいは、土産ものの店が、小ぎれいに佇んでいた。

9/14

Comfort Hotel をチェック・アウトして、Hotel Coypel に移動。

9/15

夕方、はやめに議論を切り上げてパリに向かった。Massy Palaiseau の駅へ向かう道路を快走していくのだ。途中で、B 氏の邸宅がある Igny にそれる道に分岐する。しばらく走っているあいだに、様子が違うことに気がついた。あきらかに、高速に入っているのだ。「ちょっと様子が違うようだが」「直接パリに行くのだ」とのこと。車でパリに向かうのははじめてである。とくに、ラッシュではなかったが、結構な時間がかかった。ようやく、なじんだ Denfert Rochereau (ダンフェールロシュロー) の界隈の風景が目に入ってきた。すでに、7 時まえであった。ここに、B 氏はパリでの拠点になるアパートをもっている。何度か使わせてもらったが、現在は、夫人のカトリーヌ女史が仕事場として使っている。このアパルトマン (マンション) は、150 戸ほどらしく、何棟かに分かれていて、ひとつの棟は中心に円筒形のエレベーターが設置されていて、降りると各戸へ通じるという構造になっていた。車を地下駐車場に入れて、エレベーターで、10 階の居室まで昇ったのであるが、ここでアクシデントが発生した。鍵が開かなかったのである。しかたがないので、一階までおりて、そこのソファに座って、カトリーヌの帰りを待つ事にした。カトリーヌは、ソルボンヌ大学近くの、グランゼコール予備学校の物理教員をつとめる才媛である。管理人 (いわゆるコンセルジュ) がいる開けてもらえるということであったが、いまは、休暇をとっているらしく、管理人室は暗かった。しばらく、雑談しているあいだに、何人か出入りがあった。そのなかで、4、5 歳の子供が円筒のエレベーターのまわりをぐるぐると自転車で走り回っていた。ようやく、カトリーヌが帰ってきたが、心なしか、元気がなく、いつもの愛想の良さはみられなかった。

9 月 16 日

ホテル・コイペルの窓から、朝日が差し込み、週末の静寂が、パリの人々に染み渡っているのであろう。0 階 (日本では一階) の食堂は、今朝は、アフリカン・パーティで占められていた。ほとんどが、女性である。民族のシンボルである上着をまとったのもいる。聞こえてくるのは、英語のようであったが、土着語が混じっているようであった。

oooooooooooooooooooo

M さま: 如何でしょうか。目下、本邦は台風のまっさなかであるようで。斯様な本邦の災難を尻目に、わたくしめはパリのホテルの最上階の部屋からの眺めを愛でつつ、太平楽をこいでおるところで、なにか「国賊」を決め

込んでいるようで。

ともあれ、予定も明日1日を残すのみで、月曜には、なにかと騒々しい日本国に舞い戻ります。

ボテ氏との談話のなかで；フランス国は、自由の国で、男と女はいつでもどこでも、自由に involve （つまりナニをいたすこと）できるという結構な国ということにおよびました。結婚という概念が死語になりつつあるとか。とにかく結婚という拘束はフランス人の気質にそぐわない。そもそも Flynn という言葉はフランス語にはない。かたや、わが大和の国民では、ヤレどこかの議員が、flynn をいたした、どこかのタレントがどこかのタレントをいたした。。。とにかく、マスコミが叩きまくる。やりたいヤツがやるのだから勝手だといわせない、なにか、社会全体が、制裁を加えるというのは異常な現象だと思わないところが、異常に見える。

くわえて、それを面白がって見る圧倒的聴衆がひかえてオル（私めもその一人ではありますが・・・だって、こういうネタはどんな人間でももっている劣情をおおいに刺激するものですからな：）マスコミは、かように牙をむける道具になっている。フランス人にすれば、バカな民族であると思われて仕方がないであろう。わたくしめの結論：「不倫をしたければ、すべからく、フランスに来るべきだ。ここでは、大手を降ってナニできますぜ」というと、B氏は、大いに笑っていました。

アホなことをいいました。それではまた10月になれば、再会をいたしましょうか。

クラツジ @Paris

9/17

瞬く間に、予定の時間がすぎて今日が滞在の最終日。

朝方は晴れていたが、東の空には黒い雲の層ができたいた。8時前に、一階の食堂に降りていった。フロントには、昨日の女性が、まだ仕事をしたい。まもなく「シフト」終了して交代の時間であろう。

朝食を終わるころから雨がふってきた。すこし激しくふったが、現在（10時すぎ）は止んでいる。これで風がふけば相当寒くなるだろう。気温は、15度くらいであろうか、日本でなら、晩秋というところである。

雲がきれて、青空が広がってきた。

6階の窓から、となりの白亜の建物（アパートであろう）の同じ階の窓が見える。カーテンを引いてあるのとなないのがある。住人が窓から外をながめる様子はない。

眼下にみおろす通りは、d'Hopital 通りで、Austeritz 駅まだつづいている。通りには、パリ名物であるマロニエの街路樹が植えられていて、その下を人々が、襟をたてながら、足に早通り過ぎていく。あるいは、ランニングをするものもいる。

フロントの女性と話をかわす。なんでも、トルクメニスタンからの移ってきた3年であるとか。ただし、国籍はまだ取得してないそうで、そのためのフランス語学校にいらっているとか。

ポール・ロワイヤル通りのチョコレートショップで、小物をいくつか購入。ちょっと太めで気さくな女性の店員と少し話しをした。なぜ、そういう気になったかという、華やかな頃の富士真奈美にちょっと似ていたからである。「あなたは、昔の日本の女優に似ている」と言う、ちょっと恥ずかしそうなおぶりをみせた。さらに聞くと、ポーランドからの移住であるそうである。10年経つとか。ポーランド人は、気さくだとB氏がいらっていたが、そのとおりであった。

9/18

別れの日がきた。。。。。。今日も晴天のようだ。東の空には新月間近の細い釜のような月がかかっている。こういう月は、日本ではお目にかかったことはない。といっても、朝はやく起きて東の空をみればいいのだろうか。

パリのホテルの6階からのながめは格別のものがある。これを贅沢というのであろう。

徹底的な美的見地から意図された建物の配置。フランス人は、長い時間をかけて街の景観というものに対して多大なる努力をしてきたのであろう。民族に遺伝的に継承されてきた美意識のなせる技であろう。翻って、わが大和の民は。。。というようなことを言っても仕方がないこと。

今回の総括は、なじみの？俳優（女優）のフランス版そっくりさんと、出会ったことである。

パリの行きつけの、Cafe Sully では、カールマルデンがいた。「マルデン」は銀縁の眼鏡をかけ、分厚い本を広げて、なにかメモをとっていた。物書きかもしれない。カールマルデンの名前を知ってるもの余程の映画通でないといけないだろう。鼻の大きな俳優で、ハリウッドの名傍役の一人であることはたしかである。ゲリークーパーの縛り首の木で最後に殺される役を覚えている。それから、ニームーマルセイユ間の列車のなかの隣の席にいた「ファデーフ」

すでに触れたカヴァイヨン ibis hotel の女将：風貌はモナリザであるが「声」が高畑淳子にそっくりである。声の質、調子、話かたがまるでそのままだ。日本語で話したとすればそのまま吹き替えで通用するであろう。ともかく、フランス人の乙にすますところが、あまりなく愛想がいい。（愛想が悪いのは、パリの人間だけかもしれない）。「電話？ ないわ。悪いわね。。」高畑淳子そっくりの調子で言った。それから、ポールロワイヤルの富士真奈美。最後はホテルコイペルでチェックアウトのときのフロントの若い女性は（女優として不発に終わった）若いころの「高木美保」であった。

ともかくも、残された（人生の）時間は、少ない。